

記録

35ミリ

カラー／28分

英・仏・独・西・露語
版

■企画

外務省

■協力

文楽協会

佐渡のろまん人形保存
会

大阪市立博物館

他

スタッフ

■製作

村山英治

■脚本

村山正実

■演出

村山英治

木塚誠一

■撮影

木塚誠一

■編集

沼崎梅子

■音楽

三善 晃

■解説

ビーター・

デュペアー（英語版）

■出演

太夫：竹本越路太夫

竹本津太夫

三味線：鶴沢寛治

野沢喜左衛門

人形：桐竹紋十郎

首製作：大江巳之助

他

〔文楽〕

第11回日本紹介映画コンクール銀賞 第21回サレルノ国際映画祭第
1位

文楽は、歌舞伎とともに日本の古典芸能として300年の伝統を持つ。古くは大道で人形を見せて歩いた集団があり、それが15世紀頃に流行した浄瑠璃と呼ばれる民衆の音楽と結びついて文楽となった。この映画には、今は亡き人形遣いの名人、桐竹紋十郎が人形の解説から舞台稽古、本舞台と、全編通して出演している。



文楽の魅力は何だろう。魂のない人形に魂を吹き込み、生身の人間では表現できない純粋な美を創造する。

文楽の演し物で有名な「艶容女舞衣・酒屋の段」。若い人妻お園が自分を捨てた夫を思い、やり場のない寂しさを訴える口説き。

今でも古い人形芝居が日本各地に残っている。佐渡の説教節人形は、人形もまだ一人遣いで、語り手は幕のかげで三味線を弾きながらひき語りをしている。幕間にはのろまん人形と呼ばれる狂言が入って客を笑わせる。それが文楽になると、首（かしら）も洗練されて写実的なものになる。

文楽独特の三人遣いを見てみよう。主遣いは首と右手、左手遣いは人形の左手を、脚遣いは脚を受け持ち、3人の共同作業で1体の人形が動かされる。舞台の人形を遣うところは一段低く、遣い手の腰から下が隠れるようになっている。主遣いは、脚遣いの操作をしやすいように高い下駄を履く。3人が一体となるには厳しい修練がある。文楽の主役は太夫で、語り物の長い伝統の上に築かれた浄瑠璃を力強い独特の発声で語る。太夫を助ける三味線も豊かな表現力を持っている。最後に戦乱の武士階級の悲劇を描いた代表作「熊谷陣屋」を見せる。三味線のバチが太夫を誘い、太夫の呻吟が人形遣いに力として伝わり、人形に魂を吹き込む。